

翔

百万石蝶談会 No 154

February 2002

オオムラサキを卵から飼育する

日吉 宏朗

1999年8月15日14時頃、金沢市湯谷原町（5436-65-29）で、採集に同行していた吉田弥生氏が見慣れない蝶がいると叫んだ。その方向には1頭の大きな蝶が、木々の間を行ったり来たりしている。近づいてみると図鑑で見知っていたオオムラサキの雌であることはすぐにわかったが、ゆらゆらと行ったり来たりする様子は、速く飛ぶものと思っていたので意外であった。しばらくは高いところにいたものの、やがてネットが届く幹にとまったので、そこを上からかぶせた。

■三角紙に産卵

三角紙に収め、興奮覚めやらぬ思いで家に向かったが、途中で気になり車を止め三角紙を開いてみたところ、三角紙の上に緑色をしたきれいな卵が数粒産まれていた。オオムラサキがゆっくりと飛んでいたのは、卵を産み付ける場所を探していたようだ。また、翌日には、展翅したオオムラサキの腹端にも卵が放出されていた。

■飼育開始

吉田氏にもすすめられて飼育を考え、松井正人氏に連絡をとったところ、石川県下では卵からの飼育例が無い事、食樹があれば大丈夫だろうとの事を教えていただいた。その時、産卵後2、3日が経過しており卵が黒くくすんできていた。孵化は間近と思われたので、すぐに食樹のエノキを探し始めた。母蝶が飛んでいたところには、きっとあるはずだと思い探しに出かけたが、エノキを知らなかったので、図鑑にオオムラサキの幼虫といっしょに載っていた小さなエノキの写真を頼りに、それらしき葉を持ち帰り、卵のそばに置いてみた。

■孵化

翌日、帰宅すると既に孵化していた。何頭かは採ってきた葉に乗っていたが、密閉容器に入れておかなかったので、残りは部屋のあちこちに移動していた。何とかそれを探し集め、葉の上のせて観察していると、葉を食べている幼虫がいたので、エノキの葉に間違いなかったと確信する。翌日は近所を探し回り、神社に大きなエノキを見つけたので、以降はそれを餌に用いた。孵化した幼虫は12頭で、これらはすべて三角紙に産卵されたものである。このうちの2頭と展翅後に産まれた卵の飼育については松井氏に依頼し、残った10頭を1つのプラスチック容器に入れ飼育することにした。展翅後に産まれた卵は、展翅板を入れた箱と一緒に入れてあった防虫剤が影響したのか、孵化しなかったようだ。

■飼育方法

8月は暑く、昼間のアパートは温室状態になってしまうので、クーラーを常時つけて室温を25℃にセットした。餌の葉は、水でぬらしたティッシュペーパーでふき、かわいたティッシュペーパーでからぶきしてから与えた。エノキの葉は枯れやすいので、葉だけではなく枝についた状態で、枝の切り口には水を含んだティッシュペーパーを巻き、さらに

水の蒸発を防ぐためにアルミ箔で覆って容器に入れた。こうすると夏に3～4日、秋には1週間程度交換しなくてすんだ。ただ、フンがすぐにたまるので、こまめに除くようにし、容器内には湿気がこもらないように木炭を入れた。また、病気が発生したときに全滅を防ぐため、8月下旬に飼育容器を2つにし、幼虫を5頭ずつに分けた。幼虫は葉を食べるとき以外はたいてい顔を伏せた状態で葉の先端でじっとしている。幼虫は口から吐く糸で一枚の葉の上を覆ってそこを定位置とし、葉を食べるために移動したあとはその位置に戻ってきていた。始めはそのことに気づかず、葉を交換するときは葉についている幼虫を糸からはずし、新しい葉に移していた。新しい葉に移し変えられた幼虫はしばらくうろうろした後、頭を左右に振りながら葉に糸を吐いていた。そんなこともあり、葉を交換する際には、幼虫が乗っている葉を枝から切り離し、それを新しい葉にのせておくことにした。そうすると、移動してしまうものと葉が枯れても移動しないものがいた。

■幼虫の変化

脱皮2、3日前になるとじっとして動かなくなり、頭の付け根がふくれてくる。脱皮後、体の皮殻だけが食べられ頭殻は残されていた。一度も脱皮途中を見られなかったのが残念である。1齢幼虫は頭が丸かったのに2齢幼虫からは角が生え、体には三角の突起があらわれた。3齢幼虫では角も体の突出物もひとまわり大きくなった。9月中旬に1頭の動きが鈍くなり、腹のあたりが黒ずんできた。葉も食べる様子がなくなり、翌日には死んでしまった。原因もわからず、残りの幼虫が育ってくれるのか心配になったが、他の幼虫におかしな様子はあらわれなかった。

■越冬幼虫

10月に入り、日中あまり気温があがらなくなつて、飼育容器を屋外に出した。葉が少し黄色に色づいてくると食べる量が減り、4齢から越冬幼虫が現れはじめた。越冬幼虫は、角が太くて短い棍棒状になり、体がずんぐりしている。ところが、中には角の片方が棍棒状で、もう片方は脱皮前と同じ様な枝分かれした角になるものがいた。この片方が棍棒で片方が枝分かれした中途半端な4齢幼虫は3頭いたが、いずれもさらに脱皮し5齢で両方の角が棍棒状の越冬幼虫になった。

11月になると、もう葉を食べなくなり、葉の色に合わせ越冬幼虫の体色も変わりだした。変わり始めはまだら模様の不気味な色で、病気にでもなったかのようだった。体は徐々に黄緑色になり、茶色へと変わっていった。茶色になったころには皮も厚くなって体が引き締まり、ひとまわり小さくなった。冬越しは、葉にくっついて行うようなので、葉を食べなくなった後も容器に数枚の枯れ葉を入れておいた。

12月になり、あられや雪が降り始めたので、プラスチック容器だけでは温度変化が激しいと考え、12月中旬に葉についた幼虫を土の入った素焼き鉢に移してストックングをかぶ



4齢幼虫頭部の抜け殻

左:片方が棍棒状で片方が枝分かれした頭部。年内にもう1度脱皮して右に有る越冬幼虫の頭部になった。
右:越冬幼虫の頭部。翌年脱皮。

せ、発泡スチロールで包んだ容器に入れた。何も食べていないためか、幼虫はあっさり小さくなっていった。幼虫は寒い中でもときどき鉢の中を移動し、数頭が寄り添っていることもあった。

3月になり暖かい日も多くなってきたので、餌がない状態で幼虫が動き出してはいけないと思い、幼虫をプラスチック容器に移し冷蔵庫に入れた。この時に、幼虫の体長を計測したところ、11月に計測したときと比べて、平均で1.5mm縮んでいた。

越冬幼虫の体長変化（データは小さい順に並べてあり、個々は対応していない）

計測日	越冬幼虫の体長（角を含む）										平均
1999年11月7日	17.5	17.8	17.8	18.0	19.0	19.2	20.5	21.0	22.1		19.2
2000年3月8日	16.5	16.8	17.0	17.0	17.2	18.0	18.0	18.5	20.2		17.7

■飼育再開

4月に金沢市から輪島市に移り、幼虫も輪島市へ持っていった。輪島の海岸付近にはエノキがたくさんあり、餌には困らないと思っていたが、芽吹きが遅く、冷蔵庫から出すのが5月になってしまった。3月に冷蔵庫に移してからほとんど容器の様子を見なかったため、容器内に溜まった水につかるなどして5頭が死に、4頭が生き残っていた。この時、4齢幼虫4頭と5齢幼虫1頭が入った容器で4頭が生き残り、死んだのは何齢幼虫なのか分からなくなってしまったが、体長を測定すると、15.0、17.0、17.5、18.8mmであり、5齢幼虫の方が大きかったことから、4齢幼虫3頭、5齢幼虫1頭が生き残ったと思われる。

冷蔵庫から出しても、あまり動かず葉も食べている様子もなかったが、数日後には脱皮し始め緑色の体になった。これまでの脱皮殻は食べられていたのだが、越冬幼虫の厚い皮は食べられずに残っていた。脱皮後は葉を大量に食べ始め、みるみるうちに大きくなっていった。フンも大きくなりゴロゴロしてきた。

■蛹化

6月中旬になり、狭い容器の中でうまく蛹化場所を見つけ蛹になり始めた。蛹化場所を見つけた終齢幼虫は、その周りに糸を張りめぐらせ、頭を下にしてぶら下がる。じっとしたまま動かなくなり、2日後に蛹になった。1頭は容器のふたで、3頭は葉について蛹化していた。3頭は3回目の脱皮で蛹化し、大きかった1頭は2回目の脱皮で蛹化した。おそらく3頭は4齢で越冬した幼虫、大きかった1頭は5齢で越冬した幼虫と思われ、いずれも6齢で蛹化したと思われる。

■羽化

6月30日、最初に蛹化したものが羽化した。ところが、蛹を小さな容器に入れたままにしてあったのであわてて広い空間に移したが、羽は伸びきらなかった。また、小さい容器で羽化したため、羽化直後に出した排泄物が羽にかかってしまった。羽化前には蛹が変色するらしいので、注意はしていたのだが、気が付かなかった。他の蛹もそろそろ羽化しそうなため、蛹を大きなダンボール箱に移した。葉についたものは枝ごと、容器のふたについたものは容器から糸ごと外し、枝や糸をダンボールの側面にセロテープで貼りつけた。

そのとき蛹を触ってしまうと、ビクビクと体を激しく震わせた。

7月上旬、蛹化していた3頭すべてが無事羽化した。羽化した4頭はすべて雄で、大変きれいな青紫色をしていた。これらの前翅長は、46, 47, 49, 51mmで、飼育した個体は小さくなると聞いていたが、その通りだった。しかし、羽をゆっくりと開いたり閉じたりしている姿はやはり優雅で、それでいてあの引き締まった体には貫禄も感じた。

最後に、今回の飼育を通して多大な御助言をいただいた松井正人氏に感謝申し上げる。

1999年から2000年にかけてのオオムラサキ飼育記録

日付	卵	初齢	2 齢	3 齢	4 齢	5 齢	6 齢	蛹	成虫
1999年8月15日 産卵	14								
8月20日 孵化		12							
8月23日 2 幼を別飼育		10							
8月25日 脱皮		6	4						
8月27日 脱皮		4	6						
8月28日 脱皮		2	8						
8月30日 脱皮		1	9						
8月31日 脱皮			10						
9月3日 脱皮			9	1					
9月4日 脱皮			8	2					
9月5日 脱皮			7	3					
9月6日 脱皮			5	5					
9月8日 脱皮			3	7					
9月9日 脱皮			1	9					
9月11日 2 齢死亡				9					
9月16日 脱皮				8	1				
10月1日 脱皮				6	3				
10月4日 脱皮				5	4				
10月12日 脱皮				3	6				
10月13日 脱皮				2	7				
10月15日 脱皮				2	6	1			
10月16日 脱皮					8	1			
10月22日 脱皮					7	2			
11月1日 脱皮					6	3			
2000年3月8日 冷蔵庫へ					6	3			
5月9日 飼育再開5幼死亡していた					3	1			
5月20日～26日 脱皮						3	1		
6月2日 脱皮						2	2		
6月3日 脱皮						1	3		
6月7日 脱皮							4		
6月17日 蛹化							3	1	
6月20日 蛹化							2	2	
6月21日 蛹化							1	3	
6月28日 蛹化								4	
6月30日 羽化 (♂)								3	1
7月2日 羽化 (♂)								2	2
7月3日 羽化 (♂)								1	3
7月10日 羽化 (♂)									4

《参考文献》

森 一彦(1975) グリーンブックス15 「オオムラサキの生態と飼育」. ニュー・サイエンス社.
 森 一彦(1996) 科学のアルバム78 「オオムラサキ」. あかね書房.

《ひよし あつろう 〒928-0001 輪島市河井町1部64-1》

我が家の庭のツマグロヒョウモンに天敵出現

奥 素 八 子

2001年のツマグロヒョウモンは、小松市八里台にある我が家の庭では7月3日から成虫が観察されはじめ、7月15日から幼虫が見られるようになりました。昨年同様にたくさん発生しましたので、近所の子供たちに幼虫や蛹を提供したり、近くの雑木林に幼虫を放したりしながら、庭のツマグロヒョウモンの観察と飼育をつづけました。

■寄生性天敵は未発見

7月15日から幼虫の採集を始め、164頭を採集しました。そのうち飼育能力に限界を感じて38頭を近くの雑木林に放し、子供たちには幼虫や蛹48頭を提供しました。私が最後まで飼育した78頭のうち5頭が原因不明で死亡しましたが、73頭が羽化しました。幼虫や蛹を提供した子供たちからは、全てが羽化したと聞いています。

雑木林へ放虫したものを除きますと、今年は126頭を飼育したことになりますが、この中からは、蜂や蠅に寄生されたものは見つかりませんでした。

■捕食性天敵の出現

8月上旬、まだ何頭かの幼虫が庭に残っていましたが、いつの間にかいなくなり、スミレの上に黒っぽくて汚らしい溶けた塊が見られるようになりました。不思議に思い観察していると、大きな蜂が馬乗りになって幼虫を抱えている光景を目撃しました。いよいよ天敵が現れたようです。スミレに幼虫がいることを学んでいるようで、スミレの茂みに分け入って探す様子が観察できました。こんな時は蜂にも案外スキがあり、8月16日にあっさり採集できました。採集できたのは、セグロアシナガバチとオオハキリバチで、馬乗りになっていたのはセグロアシナガバチのようです。

7月いっぱい庭は、幼虫だらけでしたが、8月に入ってからはこの天敵の出現により、一時的に幼虫はめっきり少なくなりました。ところが、8月20日過ぎからは、7月ほどではありませんが再び徘徊する幼虫が見られるようになりました。

今年の飼育は、10月1日に羽化した1♀が最後になりました。羽化したチョウは、庭への産卵を防ぐために家から離れた雑木林に放していましたが、10月になってからでも好天の日には♀が飛来しているのを目撃しました。産卵の様子は見られませんでした。どのような形で越冬しているのか、未だに越冬している様子を発見していませんので、なんとか観察したいと思っています。

子供たちに提供した幼虫や蛹の一部は、子供たちから幼稚園へ届けられ、園児たち皆でチョウの誕生を楽しんだそうです。

2001年の採集と飼育の記録

	庭で採集した幼虫				羽化		子供に提供 幼虫・蛹	放虫 雑木林	死亡
	5～10mm	10～15mm	15～35mm	35mm以上	♂	♀			
7月15日		1							5
7月16日	8	5							
7月17日			2						
7月18日	7	10	2				10		
7月19日		1	5						
7月21日	7	3	2						
7月23日			1	4					
7月26日			10	1					
7月27日		6		2			9		
7月28日			17					15	
7月29日			1						
7月30日			1						
7月31日					1				
8月2日					2	1			
8月3日					1	4	13		
8月4日					5				
8月5日					4	2			
8月6日					1				
8月7日					3				
8月8日						2			
8月9日						1			
8月10日					7	3			
8月11日			5	1	2	1			
8月12日					1	2			
8月13日				1					
8月15日						1			
8月21日					1				
8月23日			1		2				
8月24日	2		5	14		2		7	
8月25日			2	8	1			6	
8月26日		3	5	2				10	
8月27日					1				
8月28日			1						
8月29日				1					
8月30日				6					
9月3日						2			
9月4日				2					
9月5日			1				11		
9月6日				3	1	1			
9月7日									
9月8日						3			
9月9日			3	2					
9月10日						1			
9月11日					1				
9月12日					1				
9月14日					1	1			
9月15日						1			
9月16日					1				
9月17日						1			
9月19日					2				
9月20日							5		
9月21日					2				
9月22日					1				
9月26日						1			
10月1日						1			
計	24	29	64	47	42	31	48	38	5
合計		164			73				

《おくすやこ 〒923-0056 小松市八里台1 2-3》

冬期間におけるツマグロヒョウモン飼育記録

松井 正人

金沢市内において、11月から翌年5月にかけて、ツマグロヒョウモンを飼育した。石川県加賀市塩屋海岸において採集した母蝶から卵を得、これを野外温度に近い状態で室内飼育したところ、翌年の5月5日～5月19日に13♂8♀が羽化した。母蝶を採集した塩屋海岸では、5月6日から新成虫の飛翔を観察しているので、飼育条件は野外に近かったものと思われる。

■資料

2000年11月3日に加賀市塩屋海岸で採集した1♀を用い、11月4日～7日に多数卵を得た。

■飼育方法

当初は、1容器で20頭～27頭を飼育していたが、幼虫が大きくなり出した4月中旬からは1容器で3頭～7頭を飼育した。飼育容器は密閉式で、3月までは糞掃除と食草の交換は1週間に1回程度行った。食草交換時には、食草はしおれ、食草の水分によって飼育容器内に水滴がびっしりと付いていたが、凍っていることは無かった。

■飼育経過

11月19日と20日に91卵が孵化し、この幼虫を使って飼育を行った。12月2日から2齢への脱皮が始まったが、年を越した1月8日になっても初齢のままの幼虫がいた。

幼虫の成長は遅く、2月6日の計測で最大のものは7mm、3月20日の計測では5～15mmの大きさだった。生存率も低く、2月の対前月生存率は59%と最も低かった。

時期	生育頭数	対前月生存率
11月20日	91	
11月末	88	97%
1月末	74	84%
2月末	44	59%
3月末	30	68%
4月末	25	83%
5月末	21 (羽化)	84%

対前月生存率

幼虫の体長(mm)	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
幼虫の頭数	6	7	8	4	3	3	1	1	1	0	1

3月20日に調べた幼虫の体長

蛹化は4月19日から始まったが、このころから肛門付近に白いカビが生えて死亡する幼虫が出てきた。また、蛹化はしたが羽化には至らなかったものが3頭あった。

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

石川県産の記録の少ないピドニアの追加記録

井村正行

1. オオバヤシヒメハナカミキリ *Pidonia limbaticollis ohbayashii* Matsushita

1999年7月20日 石川郡白峰村白山釈迦林道 (alt.1700m) 1♀確認 井村正行

本種は、中部山岳地帯ではそれほど個体数は少ないものではないが、白山の石川県側では、これまで 数例しか記録がなかった。それも、全て雄の個体で雌は未記録であった。今回ミズキの花より、多くのヒメハナカミキリに混ざって1雌を確認することが出来た。

2. ミセンヒメハナカミキリ *Pidonia misenina* S. et A. Saito

1999年7月27日 石川郡白峰村白山釈迦林道 (alt.1600m) 1♂確認 井村正行

本種は、本州でも紀伊半島を除けば、稀な種とされている。石川県では、白山の尾口村岩間と釈迦林道で♂2頭が確認されているだけであったが、今回新たに1♂を確認することができた。ブナ原生林の中にあった咲き残りのミズキの花に、ブービエヒメハナカミキリ (*P. bouvieri*) や アサマヒメハナカミキリ (*P. takechii*) と混ざっていたものである。

《参考文献》

井村正行 (1998) コウチュウ目カミキリムシ科, 石川県の昆虫: 200, 石川県.

《いむら まさゆき 〒920-0211 金沢市湊1-128》

2001年度収支報告

会計年度は1月1日から12月31日

収 入		支 出	
項 目	金額 (円)	項 目	金額 (円)
2001年度会費	114,000	会誌作成費	99,815
当該年度以外会費	46,000	例会費	16,000
会誌売上金	56,600	博物館を作る会費	3,000
郵送負担金	26,000	郵送費	34,550
前年度繰越金	0	消耗品費	4,341
		前年度繰入金	39,119
		次年度繰越金	45,775
計	242,600	計	242,600

※年会費は2,000円、郵送負担金は500円

マイマイかぶれの井村会長
キタカブリでマイマイにかぶれた井村会長、県内各地のマイマイを揃えようとたくらんだ。まずは狼煙、木の浦と快調に滑り出し、世に名高いノトジママイマイも手中に収めた。

呼雲荘のピドニアアン澤田
昨年夏の話だが、単独で北アルプス・ピドニア採集会に参加した澤田氏、ピドニアアンとして、窪木氏、露木氏、杉村氏等と共に写真に収まり月刊むし一月号(三百七十一号)で紹介されている。

虫屋は貴重な昆虫センサー
金沢にギフの発生地は多いが、十年前と比較して最近は少なくなり、どこそこでは確認でき無くなった等々、その地域の昆虫は、その地域の虫屋が最も良く把握している。最近では若い虫屋がめつきり少なくなり、地域の昆虫を把握するセンサーが失われつつある。その結果、昆虫界の大変

動に気が付かず、誰も知らない内にいつの間にか昆虫たちは絶滅してしまう事になる。センサーを失っては、そのことすら誰も気付かない。

ナガサキの次はムラサキツバメ
関東では、ナガサキアゲハに劣らずムラサキツバメの北進も著しく、群馬や栃木でも小松市の緯度に相当する場所でも採れている。去年はナガサキに沸いたが、今年にはムラサキに沸きたい。狙い目は、虫屋が行かない人工植生のどうしようもないマテバシイとか。

北海道で発見された新種
北海道から新種の噂が二種流れていたが、月刊むし三七二号にエゾウラギンヒヨウモンとして一種が発表された。カラフトセセリのような帰化種ではなく、古くから日本に生息していた土着種のように、みは前翅性標により見分けられる。九州島の高地にも生息するようで、西日本の高地から発見される可能性もある。

北海道産、残る噂の一種は
カエデを食べるカラスジミで、幼虫の形態や成虫の斑紋も若干異なるらしい。カシワを食べるアカシジミが別種になったように、本種も別種になるかもしれない。

月刊むしにおどる「石ひよし」
エゾウラギンが発表された三百七十二号には、西表島で再捕獲された能登発のアサギマダラ「石ひよし284」があちこちで取り上げられている。長い旅路の果てに(永幡嘉之)西表島で再捕獲したアサギマダラ(西田貴明)編集後記(谷角素彦)

オオゴキブリは少ないか
マイマイ調査に精を出す井村会長、各地でオオゴキブリに遭遇。オオゴキは照葉樹林と密接な関係があり、県内では少ないとされているが、普通に見られるらしい。青森までの分布なら、照葉樹との関わりも深くないような気がする。

例会の記録

十二月六日(木)城南管工一階にて八時から開催。

話題は、スジアカクマゼミとアサギマダラ。今年、金沢で発生が確認されたスジアカクマゼミは、日本初記録。発見のいきさつから、現在判明している事まで、写真や生録の声を交えて富沢氏が報告。

アサギマダラの渡りについては、今年初めて台湾で再捕獲されたこと、今年の全国の再捕獲記録、石川県関係の再捕獲記録等が報告された。

その他の話題は、北海道のニセウラギンヒヨウモン、オオモンシロの幼虫が脱走したあと部屋には見慣れぬハエが、舐倉島のアサギ便り、オオクワは三十五度で飼う、シマゲンの確実な採集法、明日からキタカブリ、小さい虫はもう見えない、などなど。

参加は、生田(耕)、指田、吉村、山岸、井村、松井、富沢、久慈、中西、細沼(T E L 参加)の十人。

会員の動き・しゃばの動き

「月刊むし」を無料配布
むし社は、在庫一掃セールとして、十年を経過した「月刊むし」は、翌春に一冊百円で販売し、それでも残ったものは年末に無料で配ることにした。今回創刊から二三八号までの在庫が無料配布され、一冊百円で地方発送も行った。

とつくりばち六十八号発刊
二〇〇一年、新しい会則と共に再スタートした石川むしの会、会則通り会誌「とつくりばち」を年二回発行した。頁数も合計で五十二頁、内容も充実し、頁構成も良く、編集者の苦勞が感じられる。

ニホンミツバチ×キイロスズメバチ
ミツバチの巣を狙う一頭のキイロスズメ、一斉に構えるミツバチになかなか攻撃でき

ない。そこへ外回りのミツバチが無警戒で登場し、あつという間に襲われた。迫真の映像と観察内容の無視虫通信は、小幡氏が配信している。

メツシユネット
編み目が粗いメツシユネットは素早く振れ、動きが早い昆虫に適しているが、目が粗い分、鱗粉がはげやすい弱点もある。一日何百頭と採集するマーキング、網を振る毎に空気抵抗で腕が痛くなる。そこで抵抗の小さいメツシユネット、鱗粉はハゲても問題ない。

アオタマムシとキタカブリ
福島までアオタマの材採りに出かけた中西・井村組、アオタマの死骸を確認後、大きな幼虫の入った材を採ってきたが、今のところアオだかク

ロだか分からぬ。ついでにちよつと脚をのばしてキタカブリにも手を出した。

どこかもの悲しい発電機の音、遠く聞こえる発電機の音、時々ちらつく電球、かび臭い布団、懐かしき山小屋の夜。発電機の音には、思い出の琴線をくすぐる力があるが、現実に戻れば、館内改装の為、発電機を頼りにひとり仕事をしている小幡氏の姿があった。

遊泉寺でアオマダラタマムシ
キラキラ系に凝りだした中西・井村組、お天気に誘われてタマムシ採集。材内では既に成虫になっていた。

サドマイマイとアオシマイマイ
こここのところ、動きが活発な中西・井村・細沼のマイマイグループ、年末年始は、佐渡と粟島に賭けたが、日本海は大荒れで船は欠航。さればと太平洋岸に転戦し、仙台でマーク、八戸でキタカブリにツルハシを振った。

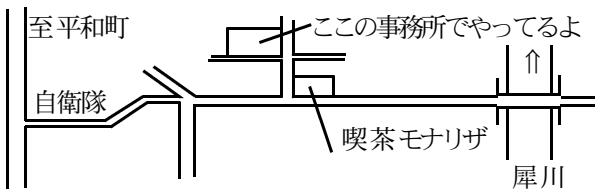
翔

154号

Tobu 2002年2月1日発行
百万石蝶談会

<http://member.nifty.ne.jp/hakusan/>
金沢市大場町東871-15 松井方
☎920-3121 ☎076-258-2727
郵便振替 00750-8-562
印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月・5月・7月の第1木曜日8時から
TEL参加もOKです (076-244-3318)



目 次 (154号)

日吉宏朗：オオムラサキを卵から飼育する	1
奥素八子：我が家の庭のツマグロヒョウモンに天敵出現	5
松井正人：冬期間におけるツマグロヒョウモン飼育記録	7
井村正行：石川県産の記録の少ないピドニアの追加記録	8
編集部：会員の動き・しゃばの動き	10